

頭皮毛根細胞で 精神疾患を診断

理研が遺伝子特定

理化学研究所脳科学総合研究センターの前川素子研究員と吉川武男子・ムリダーらのグループは、頭皮の毛根細胞に含まれる遺伝子から精神疾患を見分けられる可能性があることを発見した。

統合失調症と自閉症の患者から採取した毛根細胞を解析し、両疾患で特徴的に増減する遺伝子を見つけた。

再現性をさらに検証できれば、診断技術への応用が期待される。成果は米科学誌バイオロジカル・サイキアトリー電子版に掲載された。

頭皮の毛根細胞は脳の神経細胞と発生起源が同じで、共通する遺伝子発現パターンが存在すると考えられる。そのパターンを解明できれば、神経細胞の状態を知る手がかりになる。

グループは患者から毛根細胞を採取し、健常者から採取した同細胞と遺伝子発現パターンを比較した。その結果、統合失調症患者で「FABP4」、自閉症患者で「CNTNAP2」という遺伝子の発現量が低下する傾向があることを見つけた。